

## 父の背中

石橋潤一郎（石橋泰幸・息子）

私が小学校行くか行かないかの頃、父は西日本鉄道の職員を辞めて作家になった。西鉄時代にカレンダー制作の部署に配属され、絵を習うことを勧められたそうだ。その縁で九州派との出会いがあったのだろう。

絵を描く傍ら、公民館で町内の子供たちに絵を教えていて、私も連れて行かれた。教えは、「大きく描け」。また、塗り絵を嫌い「自分の描きたいものを描け」と言った。父は家の部屋を一つ潰してアトリエにしていた。テーマを練っているときは常に考え込んでいて、話かけられない。しかし、描き始めて「どんな絵を描いていると？」と聞くと、ニコニコして嬉しそうに話してくれた。普段は寡黙だが、絵の話をするときはすこぶる機嫌が良い。

オチさんと仲が良く、家にもよく来ていた。お酒は人とは飲むが、晩酌はしない。作品のモチーフにもなっている幾何学や三原色、宇宙、自然に関連した本を読んでいた。父にとっては自分の思考を表現することが娯楽だったのだと思う。教育には一切口を出さなかったが、「自分の好きなように生きる」ということを背中で教えられたように思う。

九州派創設メンバーのひとりであり最後まで離脱をしなかった父は、「九州派は革命を起こしてきた」と言い、九州派を生涯誇りに思っていた。「私が死んでから九州派は世に出るから心配するな」とも言っていた。

父に絵を習うことは中学に上がってから辞めてしまったが、今となっては後悔している。「自分なりに描いてみようかな」考えている今日この頃である。